

ジョージ・オーウェルの作品における本能の働き

—オーウェルはいかにしてディーセンシィを守ろうとしたのか—

田 辺 翔 平

本稿は、これまでのジョージ・オーウェル (George Orwell, 1903-50) についての先行研究で注目されてこなかった彼の小説における人の本能の働きに焦点を当て、彼が描く人間の本能的な行動を分析し、それにより彼がディーセンシィと呼ぶ道德心に基づく社会を彼はいかに守ろうとしたのかという問いを解明しようとしたものである。彼の小説では一貫して人は意識を伴う理性よりも、無意識による本能に基づく衝動を優先して行動する存在として描かれている。彼の小説における登場人物は「道徳的な本能」、「真実を求める本能」、「自己保存の本能」、「依存する対象を求める本能」、「判断する本能」の5つの本能に突き動かされている。彼は無意識の本能的衝動によって生じる人々の様々な心理とその問題点を著書によって人々に認識させることでディーセンシィの道德心を人々に抱かせようとした。

オーウェルは「人間の本性を改善せずに社会のシステムを変えても意味がない」という立場と、「社会のシステムを変えなければ、人間の本性は改善できない」という双方の立場に立ち、人の精神を内面と外面の両側面から改善していく必要があると考えていた。まず前者の立場に基づき、オーウェルは悲劇的小説を書くことで、たとえ悪に敗れたとしても価値を保ち続ける善の精神が存在することを読者に認識させ、人々に道德心を抱かせようとした。人は生来的に「道徳的な本能」を身に着けており、目の前にいる傷ついた人を助けたり、戦場において目の前の人を撃つことをためらってしまうといった、生来的な人権意識を他者に対して感じることで道徳的な行動を無意識に人はとることができる様子をオーウェルは描いている。さらに人は「真実を求める本能」を持ち、ジレンマに陥った際や日々の苦役から解放された際に人は真実を求める衝動に動かされると彼は考えていた。また、オーウェルは子供を知性面では白紙状態であるが、精神面では無垢な純粋さと「自己保存の本能」に従う残酷さの両方を生来的に兼ね備えていると考えていた。その為、子供は愛情のみを受けても恐怖のみを受けても、結果的に大人になったときトラウマが残るということを、オーウェルは『1984年』と『楽しかりし日々』において示している。そして彼は人生とは失敗の連続であり、心にトラウマが残ること

は避けられないという見方をしていた。人は過去のトラウマを回心などによって解消しようとする心理が働くが、人々がディーセンシィの感覚を保持する為に、回心の際の危険性を認識しておくことの必要性を、オーウェルは『1984年』で読者に訴えているのである。なぜなら、オーウェルは心のわだかまりが取り除かれて自分は生まれ変わったという感覚を得た後に、その人は生来の本能的な狂暴性を曝け出す可能性があることを意識していたからである。この危険性が『1984年』の結末でウィンストンがカルト的なビッグ・ブラザーの教義を受け入れるという描写によって読者に示されている。さらに人は「依存する対象を求める本能」を保持している為、過酷な現実と直面した場合、人は回心などの行為を通して精神的に依存できるものを求めるという心理が働くとオーウェルは考えていた。『1984年』においてこの心理は、ウィンストンにジンを飲むこと、性行為、そしてカルト的教義に無意識のうちにはまり込む状態へ導くという負の面が強調されて描かれている。さらに周囲の人々から孤立した人は依存できる対象として特定の人物に自分を理解してもらいたいという願望を持つようになり、その感情が夢などの無意識的なものに表れ、その情動に突き動かされる心理を持つようになるとオーウェルは考えていた。人は依存できるものや特定の人物を見つけた場合それらにのめり込み、たとえそれを止めたくなくても止められなくなるほどの深みの中にはまってしまう心理があることをオーウェルは危惧し、その危険性を『1984年』で読者に認識させようとしている。また、オーウェルは中庸の精神をディーセンシィの道徳心において重視していた。美德に基づく思想や、自分自身と他者の心の中に隠れている「自己保存の本能」による生来的に暴力的な気質に対して反抗することで中庸の精神を保たせることが重要であると彼は考えていた。

その一方でオーウェルは「社会のシステムを変えなければ、人間の本性は改善できない」という立場も同様に重視しており、社会を政治によって改善する必要性を著書で強調している。人は社会規範に無意識に従う存在であり、その社会規範を形成する政治においても中庸の精神を含むディーセンシィの感覚が守られる必要があるとオーウェルは考えていた。特に彼がナショナリズムと呼ぶ政治的に偏向した心理状態に人は無意識に陥る危険性を彼は認識しており、それを『1984年』でその世界に住む人々の心理として登場させ、絶えず悪の敵国を打ち破る偉大なるビッグ・ブラザーを崇めるカルト崇拜の思想として描いている。『1984年』の社会においては、この思想によって築かれた社会規範に基づいて本能的に動き回る人間を昆虫に喩えて、その社会の異常さを表現している。オーウェルは個人の活動の範囲内で精神的な成長を遂げるには限界があることを認識していた。彼は自然の成り行きの力が人生を決定付ける宿命論的な立場を取っており、人に精神的な成長を遂げることを可能にする社会環境を築く必要性を訴えている。また、人は「判断する本能」を保持しており、本能的に物事を判断する心理があるが、これは無意識による判断であり客観的な妥当性がないとオーウェルは考えており、政治の世界

において本能的な感覚で物事が判断される状況を懸念していた。そして彼は政治において本能的な判断を防ぎ、極端な思想が排除される中庸が達成される為にまず必要なのは、意識を伴った言葉の使用であると考えていた。その為、政治において既存の決まり文句を並べたものを無意識的に述べるのではなく、自分の言いたいことをまず心に思い浮かべ、それに当てはまる言葉を意識して使用することが大切であるとオーウェルは「政治と英語」において指摘している。オーウェルは無意識の本能的衝動によって生じる人々の様々な心理とその問題点を著書によって人々に認識させることでディーセンシィを守ろうとした作家であった。